

地域づくりと景観保護



奈良迫 英光

一、はじめに

13年ぶりに鹿児島市に居を移し驚いた。以前は居間から桜島が見えたのに、ベランダの端に行かないと全体像を見ることが出来ない。明らかに家の周りに大きな建物が建ち、景観が損なわれている。

鹿児島市を訪れた観光客は、まず城山の展望所から桜島の遠望と市街地を望む人が多く、日に7回変化すると言われる桜島の姿に感嘆の声をあげる。市街地に近くて、錦江湾のような海から直接聳える火山は世界的にも珍しい。

城山の展望所は高台にあることから桜島を遮る建物はないが、市街地の景観は毎年変化している。高層ビルが増える一方で空き地や大きな原色の看板、のぼり旗も多くなっている。文化ゾーンにおける建物の高さ制限や原色・広告の規制などが必要である。

二、木造駅舎の魅力

県内には築100年を越す木造の建物が残されており、その代表的なものが、JR肥薩線の「嘉例川駅」と「大隅横川駅」である。

かつては地域の象徴であり、軍人達が万歳三唱の音頭で戦場に旅立ち復員し、高度成長期には中学、高校を卒業したばかりの若者が涙とともに旅立って行った場所で、昔の良き思い出を残し、心の豊かさを彷彿させる場所である。

両駅とも、「はやとの風」が運行開始された時、無人駅に特急が泊まる駅として、全国

的に有名になった。駅舎は天井が高く、柱や梁、銚がむき出しになり、時の長さを感じさせる。

春は桜、夏はひまわり、秋は紅葉、冬はスイセンの花が咲き、訪れる人の心を慰めてくれる。いつまでも残したい風景がそこにある。

三、武家屋敷の活用

県内には「伝統的建造物群保存地区」が残っている。江戸時代、薩摩藩では鶴丸城（鹿児島市）を本城とし、領内の各地に外城と呼ばれる行政区画を設けて、それぞれに地頭仮屋を設け、その周辺に「麓」と呼ばれる武士集落をつくった。代表的な場所として、「出水」「入来」「知覧」で、各武家屋敷と街路の両側に築かれた石垣や生垣、木々が落ち着いた街路景観を醸し出している。

開放している武家屋敷や庭園も多くなり、地域の魅力発信にもつながっている。庭園を

活用した野点や灯りの祭典は、武家屋敷に似合うイベントである。これから大規模な土地利用の転換を図る再開発事業では、歴史的景観が残る地区をどのように整備していくかが課題である。文化財、古民家、古木などは残すか移設する方向で取り組み、一方では周辺の住民にも理解を求め、のぼり旗、広告物の撤去など美しい景観保持が求められる。

四、「黒川温泉」の取組

黒川温泉は高度成長期から阿蘇や別府温泉に押されて観光客の通過地点となり、寂れた温泉地となった。そこで温泉旅館の主人であるGさんを中心に、地域を挙げて景観に配慮した地道な街づくりが進められた。

黒川温泉全体を「一つの宿泊施設」として位置付け、「道路は廊下」、「旅館は小部屋」のコンセプトで各施設も取り組んだ。温泉街の入り口の看板は、黒字に白文字で20数軒の



伊仙町（鹿児島県大島郡）石垣、阿権集落の看板



鹿児島県日置市美山地区の標識

旅館の名前が書かれており、上品で高級な雰
囲気を醸し出している。

施設の屋根は黒瓦、柱は黒、壁は黄土色に
統一されている。人工物を押し、庭木は雑木
林の自然体である。「自分のところだけが儲か
ればいい」のではなく、「黒川温泉全体の施設
が栄えるように助け合う」という精神のもと
に協調が図られている。取り残された温泉地
が、今や九州を代表する観光地となっている。

五、農山村地域の活用

今地方では、モータリゼーションの発達、
人口減少に加えて高齢化が進み、商店街はシ
ャッター通りに、農村部では利用されない田
畑が増え荒廃が進んでいる。戦後は多くの
人々が農村地域に住み、田畑の開墾、米や野
菜の収穫などをしながら地域コミュニティが
図られてきた。

田舎の風景は、自然を相手に川の流れや風

向きを計算して作られ、先人たちの知恵が活
かされており、訪れる人々の心を癒してくれ
る。荒れ放題の沿道を整備し、駐車場やトイ
レ等の整備を行い、美しい景観を守ることが
持続可能な地域となる。

しかし構造改善事業等により、水路から藻
魚、貝、とんぼなどの生物がほとんど姿を消
している。棚田やため池の保全、水路には石
積を利用するなど川の生物が住める環境に配
慮して欲しいものである。

ヨーロッパでは、ドイツ、フランス、イタ
リア、スイスなど地方の美しい農山村地域に
観光客が訪れ、グリーンツーリズム等を楽し
みながら長期滞在している。

北海道の「美瑛」、「富良野」の田園地帯は、
植え付けから収穫まで景観に配慮した耕作に
心がけ、四季折々の美しい自然の姿は観光客
の人気の場所となっている。美瑛の丘は「パ

ツチワークの路」と呼ばれるエリアがあり、従来からそこに立つ木々は「セブンスターの木」や「ケンとメリーの木」、「親子の木」などの愛称が付けられ、CMの舞台にもなっている。文部唱歌や校歌に歌われた田舎の風景こそ貴重である。これからも自然の摂理を大事に美しい農山村風景を守りたいものである。

六、魅力ある観光地づくり事業

県では「魅力ある観光地づくり」を進めており、平成18年から毎年10億円（1カ所1億円程度）の予算を投入し、美しい景観づくりに努めており、「地域が推薦した箇所」等を審査して重点的に整備している。

長島町、薩摩川内市、出水市、離島、錦江湾沿線の市町村、離島を始め県下全域で景観整備・保護が進んでいる。自治体の財政が厳しい中、積極的に応募して良好な景観整備・保護に努めてもらいたい。

七、これからの地域づくりと景観保護の取組

日本人の国内旅行や消費は成熟し、旅のスタイルは多様に変化している。日本の原風景が残り、地域ならではの「体験」、「食」、「文化」を楽しむ散策できる地域が人気となる。

地域づくりは住民、事業者、行政の協働が大切であり、住民の合意形成を図ることが不可欠である。特に街づくりをリードする公共空間の整備が重要になっている。

ナビの普及で過度の案内標識は不要になっている。沿線の観光看板は統一したデザインで、連続性を持たせることが分り易い。案内板の大きさ、形や色に配慮した集約化が美しい景観を保つこととなる。

美しい自然が残る離島では看板を無くし景観を保護することが魅力の島となり、そのことで島の価値が高まり来島者も増えると考



湯布院（大分県）の自動販売機



小布施町（長野県）の「葛飾北斎館」の入り口

えている。

「道」は貴重な観光資源である。電柱の地中化を進め、沿線に四季の草花を植栽し、古木は残し、橋やガードレールの色は周りの環境に配慮するなど工夫が求められる。

沿線の川の法面は殺風景なコンクリートではなく、石やレンガ使い、水藻が生え魚の住む清流への環境整備が望まれる。博物館や美術館、図書館等の文化施設は、プロムナードを草花の植栽で、明るい雰囲気を出したい。入りたくなる環境づくりが求められる。

八、おわりに

景観保護と経済活動との共生をいかに図るかが問われている。保護から経済効果創出という視点で武家屋敷を活用し、「薪能」「歌舞伎」「文楽」「野点」「灯り」等の文化的行事を四季の変化に合わせて開催することで誘客が図られ、後継者養成、地域の活性化にもつ

なると考える。学校でも「景観保護の重要性」を低学年から学ぶ機会を提供しなければならぬ。欧米に比較すると景観保護に対する取組が遅れている。

良好な景観は地域の個性（魅力）を伸ばし、日々の生活の一部となる。住民が我が街の魅力を語ることが誇れる街となる。

「景観」はそこに住む人々の「心」を映す「鏡」であると信じてやまない。

秋日ざし 明るき町の、こころよし

何れの路に 曲がりて行かむ

く窪田 空穂く

（元鹿児島県観光プロデューサー）

《参考資料》船瀬俊介・著『日本の風景を殺したのはだれだ』（溪流社）